

第4章「教師としての学びと成長」・『問題解決学習入門』藤井千春、学芸みらい社、2018年

奈良教育大学 中澤 静男

本章には、研究授業における授業構成、授業観察、授業後の研究協議といった、教員の専門的研修におけるスキルや考え方、目指す教師像やそのための日頃の努力目標などが具体的に示されている。また「おわりに」には、本書全体をつらぬくメッセージとして「まず教師自身が、授業の構想・実践・分析の楽しさと喜びを実感することから始めなければなりません。」と述べられており、いじめや一部の教員のハレンチ行為などが喧伝され、教員や学校に対するバッシングが日常化している昨今だが、教員の仕事に対する明るい希望を感じさせる。

本章の教員の専門的研修に関わって、次の3点より考察を加えたい。第1に授業構想時の着眼点について、第2に授業観察の方法について、第3が子どもの観察記録に関してである。

第1の授業構想時の着眼点についてである。著者は、子どもたちを「マス」として扱うことを戒め、個々の子どもの視点に立たなければならないと述べている。また、特定の子どもの学びや意識の流れを予想して授業を構想し、子どもの学習活動を分析・検討することで「子どもを捉える力」を養うことの重要性を指摘する。この「特定の子ども」を選定し「子どもを捉える力」を高めるための研究には、違和感がある。授業は子どものためにあるのであって、子どもの理解力や思考力を深め、視野を広げることが教員は第一に考えている。子どもは一人で学ぶのではなく、集団での対話を通して学んでいくという事実を踏まえたとき、特定の子どもではなく、学級集団としての意識の流れを想定して授業を構想することが重要であろう。また、子どもを捉える力の養成を授業場面だけで考えているが、休憩や給食、清掃など、学校教育の全ての時間、また家庭訪問時に教わった学校外での子どもに関する情報など、すべてを材料に包括的に子どもを捉える力を養うべきであることを付け加えたい。

第2の授業観察の方法についてである。著者は、研究授業で観察してほしい数人の子どもを指定し、若手教員に観察記録を依頼するという具体的な方法を提案している。ここで問題となるのは、観察記録を担当する若手教員と担任の、個々の子ども理解の程度の差である。著者は「その子どもの「よさ・成長・可能性」が示されているような言動を記録します。」と述べるが、個々の子どもに関する情報をほとんどもたない若手教員が、「よさ・成長・可能性」を見だし、記録できることに疑問を感じ得ない。

第3の子どもの観察記録についてである。記録を取ることを著者は「教師の子どもを捉える枠組を柔軟に機能させ、豊かなものに再構築し続け、子どもたちそれぞれの個性的で豊かな成長を保証することにある」と述べている。子どもを捉える枠組を柔軟にする重要性はよく理解できるが、そのために上述したように、授業だけでなくあらゆる場面を活用することが重要であり、特に日記は、担任と子どもとの1対1のやり取りであり、本音をつかむ機会にもなる。観察記録は教員が取るのではなく、子どもに取らせる方が、子どもが自らの学びを振り返るといって自己評価力を高める方法として有効なのではないだろうか。

著者は研究授業について、「子どもの意識の流れを具体的に想像し、それを最大限に活かせるような学習指導案（学習活動案）を作成することは大切な修業です。」と述べている。まだ担当する子ども決まっていない時期（1年前！）に、総合的な学習の時間の計画書や予算書の提出を求めることが当たり前になってきているが、「子どもの意識の流れ」を想像すること、授業中も敏感に察知して授業の流れを柔軟に変更する力こそが、教員としての専門的力である。授業観察においても、授業者の一挙手一投足を監視するのではなく、学級全体の意識の流れを把握し、それに対する授業者の支援内容や方法を学ぶべきであろう。働き方改革が叫ばれる現在であるが、教員の専門性を高めるためには、授業研究がますます活性化されることに期待したい。